

Newsletter

No. 16

- 1 2014 年下半期の地域研ニュース
「カラム」雑誌記事データベース・プロジェクト
アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会 (CELAO) の開催
スマトラ大津波の復興 10 年の記録をスマホ・アプリで公開
ブラジルの伝統芸能「カポエイラ」の国際シンポジウム
- 5 地域研・関連地域研究シリーズ (全 3 巻) の刊行開始!
- 6 地域研 データベース探訪 第 1 回
フィールドノート・データベース
- 9 ワークショップ・ピックアップ
- 11 2015 年度の共同利用・共同研究プロジェクト
- 12 京都大学地域研究統合情報センター 共同研究ワークショッププログラム
せめぎあう眼差しー 関連する地域を読み解くー
- 13 アジアの防災コミュニティを担う次世代を育てる
自著を語る
- 14 JCAS NEWS
出版物の紹介
- 15 亀田堯宙助教が着任しました
The Last Photograph



Photo by Y. Murakami

『カラム』 雑誌記事データベース・プロジェクト

今日のマレーシアでは、国民的な文化価値を育て国際社会で紹介しようとする試みとして、植民地化以前に書かれた王統記や宗教書を「民族の歴史の宝庫」と呼び、テキストのローマ字化や英訳などを進めています。これらの書物が当時の現地文化を示す貴重な資料であることは疑いありませんが、マレーシアが世界に誇るべき国民の宝物はそれだけではないと私は考えています。独立から今日まで多民族社会を切り盛りしてきた50年以上の経験と、それに先立つ独立準備期の経験こそが、今日の世界に伝える意義のある宝物だと思います。

マレーシアの特徴は社会の混成性にあります。マレー人ムスリムが国民の多数派を占め、イスラム教が社会に大きな影響を及ぼしているものの、中国系やインド系をはじめとする民族マイノリティも多数います。中国語やタミル語で教える公立学校が国民教育制度の枠内で認められており、各民族の言葉でテレビ・ラジオ放送や新聞・雑誌があります。それほどの多民族社会でありながら、民族間の深刻な衝突をほとんど経験することなく今日に至っています。

1950～60年代の建国期には、社会主義やイスラム国や欧米型社会などの選択肢の中でどの方向に進むべきかが真剣に議論されていました。このときの議論の多くは現在のマレーシアでも十分通用するし、アジアやアフリカの問題を考える上で参考になることも多いと思います。この時期にさまざまな場で行われていた「言葉の戦い」こそ、マレーシアが世界に誇り積極的に発信していくべき国民の宝物です。

地域研では、1950～60年代を中心にマレーシアで刊行された定期刊行物を収集して、それらのうち『カラム』を中心に記事データベースを作成・公開しています。ジャウイ（アラビア文字）で書かれている記事はローマ字に翻字して、イスラム教徒以外のマレーシア人や外国人にも読めるように工夫しています。

2014年度には『カラム』のローマ字翻字版記事データベースが完成し、7月に東京国際ブックフェアで、11月にマレーシアの国立言語出版局（DBP）でそれぞれ公開セミナーを行って記事データベースを披露しました。7月の公開セミナーにあわせて、マレーシアの出版・著作権を扱うコタブックと地域研が学術交流協定を結びました。11月の公開セミナーでは、マレーシアの図書館・文書館のスタッフや図書館学を学ぶ学生が多数集まり、マレーシアの図書館や文書館が進めているデジタル化が抱えている課題などが議論されました。

このプロジェクトはマレーシアでも高い関心を集めており、新聞やテレビでも何度も取り上げられています。2014年11月18日には、マレーシア国营テレビ第一チャンネル（RTM1）の朝の情報番組「おはようマレーシア」に原正一郎センター長と筆者が出演してプロジェクトについて紹介しました。また、12月24日にはRTM1の情報番組「パノラマ」で、東京国際ブックフェアで実施した公開セミナーの様子および『カラム』復刻の活動が紹介されました。

新聞では、「歴史の宝庫を編纂する」（9月13日付 Utusan Malaysia 紙）、「ジャウイ文書のマレー語データベース」（12月2日付 Berita Harian 紙）、「カラムは民族の歴史の記録」（12月10日付 Berita Harian 紙）など、いずれも紙面のほぼ全面を使ってプロジェクトの内容や意義が紹介されています。

（山本 博之）



マレーシア国立図書館の館長（右から5番目）と同図書館のアーカイブ部門のスタッフたちとともに（2014年11月17日）



マレーシアのテレビ番組「おはようマレーシア」（RTM1）にてプロジェクトについて説明する原センター長（右から2番目）と筆者（2014年11月18日）

アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会(CELAO)の開催

2014年9月16～18日の3日間にわたり、京都大学文学部校舎において、アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会(CELAO: Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía)の第6回研究大会(京都)を開催しました。同協議会は、アジア太平洋地域のラテンアメリカ研究者の交流促進を目的として、2003年に日本で結成された研究交流機構で、日本のほか、オーストラリア、ニュージーランド、中国、台湾、韓国、インド、フィリピンなどの研究機関が運営に携わっています。全体会議にあたる研究大会は、2年に一度、開催されています。

今大会は「ラテンアメリカの伝統と現代性を再考する」をメインテーマとしました。これまでの研究大会は、アジア太平洋地域とラテンアメリカの関係に焦点をあわせたテーマを設定してきましたが、今回は、ラテンアメリカ自体に関心を向けました。つまり、過去に取り組まれてきた議論や研究を改めて見直し、新たな視点や歴史的な視点について再考し、深化させることを主眼としました。同時に、アジア太平洋の研究者が集う機会であることから、アジアとの比較や関係性についての考察を行うことも目的としました。

今大会は、開会式のほか、2つの基調講演、9つのパネル(発表総数33件)、13の分科会(発表総数39件)をプログラムとして組みました。パネルおよび分科会は、文学、言語、歴史、文化、政治、経済、社会、国際関係、環境など、多様な分野に及んでいます。

過去の研究大会の参加者は、多い場合でも50名程度でしたが、今大会は従来の規模のほぼ倍の101名の参加者となりました。その内51名は外国からの参加であり、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、イスラエル、韓国、メキシコなどからの研究者でした。

基調講演は、ラテンアメリカと日本の関係・経済発展パターンの比較に関するものと、今世紀のラテンアメリカ政治に関するものでした。こうした基調講演と関連したテーマや課題をより深く議論したパネルや分科会が見受けられました。最初のラテンアメリカと日本などのアジアとの関係・比較については、パネル「ラテンアメリカの新たな地域統合とアジア」やパネル「メキシコと日本の社会的経験と協力」、分科会「ラテンアメリカとアジアの現在」などがありました。また、二つ目の政治関係では、分科会「ラテンアメリカの比較政治動態」やパネル「ラテンアメリカの地方政治」、パネル「アジアの民主主義と社会資本」などが挙げられます。

他方、パネルや分科会の間でも、有機的な連関性が見られました。例えば、歴史・文化関係で、パネル「植民地期と現代のメキシコの先住民の起源と正統性をめぐる過去の再構築」と分科会「エスニック、人種、文化」、あるいはパネル「サパティスタ自治地方組織の構築」と分科会「メキシコの農村社会」などがありました。

そうした連関性は好意的に受け止められたようで、とくに国外からの参加者より、きわめて充実した内容の大会であった旨の感想が寄せられました。

次回大会は、2016年にニュージーランドで開催される予定です。

(村上 勇介)



スマトラ大津波の復興10年の記録をスマホ・アプリで公開

22万人以上が犠牲となったスマトラの大津波（インド洋大津波）から10年目を迎えました。地域研は、2006年の設立当初からインドネシア・アチェ州の復興過程を調査研究しており、筆者が関わった2011年には州都バンダアチェ市で国際ワークショップを行うとともに、シアクアラ大学津波防災研究センター（TDMRC）と学術交流協定を結び、防災分野における日本とインドネシアの国際協力に取り組んできました。以来、アチェと京都を相互に訪問して行う「京都＝アチェ国際ワークショップ」を開催しています。

3年間で11回目となる今回のワークショップは、バンダアチェで開催され、地域研からは原センター長、山本准教授、西准教授、亀田助教が参加しました。これまで地域研が現地の関係諸機関と協力して取り組んできた復興過程の記録と表現についての成果をさらに一歩進め、これまでに構築してきた復興過程に関するデジタルアーカイブをスマートフォン（スマホ）で見られるアプリとして発表しました。

3つのアプリの組み合わせにより、被災地から遠く日本にいてもインターネット上の仮想地球儀によって被災地の様子に触れることができ、発生から10年が過ぎた災害への関心への導入となることが期待されるとともに、現地訪問の事前学習にも役立ちます（アチェ津波アーカイブ）。現地では、スマホをかざすと現在いる場所からどの方面のどのくらいの距離に津波遺構があるかがわかるとともに、街なかでスマホをかざせば被災直後から現在まで景観がどのように変化してきたかを知ることができます（アチェ津波モバイル博物館）。さらに、被災当時やその後の写真をもとに、同じ場所で同じ角度から写真を撮るための場所探しを支援するアプリにより、被災と復興による景観の変化を記録することができます（アチェ津波被災地メモリーハンティング）。これらのアプリにより、実際に被災地を訪れる人が増え、過去の写真や現在の景観をもとに被災からの復興過程について話をする機会が増えることで、日本とインドネシアを結ぶ防災コミュニティづくりの一助となることが期待されます（アチェ津波アーカイブは首都大学東京の渡邊英徳研究室との共同開発、アチェ津波被災メモリーハンティングは国立情報学研究所の北本朝展准教授との共同開発による）。

今回の正式リリースでは、日本とアチェの参加者が一緒にアチェのフィールドでメモリーハンティングを行いました。この動きはアチェからほかの被災地にも移り、2015年1月にはJSTの日本・アジア青少年サイエンス交流計画（さくらサイエンスプラン）によりアチェの学生4人を含む6人が来日し、日本の高校生と一緒に、20年目となる阪神・淡路大震災の被災地のメモリーハンティングを実施しています。

この取り組みは、インドネシアと日本のそれぞれのマスメディアでも報じられ、社会の高い関心を集めました。災害の記憶と教訓を継承することの大切さは唱えられていますが、国境を越えて被災地どうしを結び付けることで国を越えた広がりを持つ防災コミュニティの萌芽となることが期待されます。

（西 芳実）



スマホ・アプリ「メモハン」を使ってアチェ津波被災地のメモリーハンティングを行う。「メモハン」はGoogle Playから無料でダウンロード可能。<https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.ac.nii.dsr.cias.hunting2&hl=ja>



バンダアチェで行われたスマホ・アプリの発表会の様子。左から原教授（地域研センター長）、ハイルル・ムナディ氏（シアクアラ大学津波防災研究センター・センター長）、イリザ・サドゥティン氏（バンダアチェ市長）。地域研が開発した災害関連のスマホ・アプリについてより詳しく知りたい人は「災害対応の地域研究」プロジェクトHPをご覧ください。<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app.html>

ブラジルの伝統芸能「カポエイラ」の国際シンポジウム

2014年9月12日に京都大学稲盛財団記念館において、国際シンポジウム「抵抗と解放の身体——ブラジル伝統芸能『カポエイラ』による対話と実践」が行われました。

カポエイラは、16世紀よりアフリカからブラジルに奴隷として連れてこられた黒人によって創出されました。戦闘・遊戯・舞踊の要素を併せ持つカポエイラは、アフリカ起源の楽器が奏でる音楽に合わせて行われます。奴隷が集い、団結力を育むものとして支配者から危険視され、法律で禁止された時代もありました。また、男性中心の芸能として発達したことから、女性が男性と同等の身体表現をすることに対する偏見は根強く、女性が積極的に参加できるようになったのは最近のことです。この伝統芸能は、ブラジルにおける民主主義の浸透に貢献すると共に、人種やジェンダーの問題とも真摯に向き合ってきました。つまり、カポエイラは抵抗と解放の担い手として、ブラジル社会において重要な役割を果たしてきたと言えます。

このシンポジウムは、『カポエイラ・アンゴラ国際交流イベント2014——ジンガ・インズィンガ』(2014年9月5日～14日)の一部として実施されています。プログラム全体としては、カポエイラを実践的に学ぶワークショップを計5回、カポエイラの歴史や社会的役割を考察するシンポジウムを東京と京都でそれぞれ開催し、合計で340名の参加者となりました。講演者および指導者としては、カポエイラの維持発展に尽力されているパウロ・バヘット、ホザンジェラ・アラウージョ、パウラ・バヘットの各氏をブラジルよりお招きしています。この3名は、カポエイラ文化の研究所をNPOの形で創設された方でもあります。東京のシンポジウムでは、主にジェンダーの観点から議論が展開されたのに対し、京都で開催された本シンポジウムでは、アフリカや日本も交えたグローバルな視点からカポエイラについて分析が行われました。また、3名の討論者より、フランツ・ファノンに関連するポスト・コロニアル論、ジル・ドゥルーズのマイノリティ論、越境による文化の接触・変容といった様々な視点が提示され、活発な議論が展開されました。本シンポジウムの前後には、聴衆も交えた形でカポエイラが実践されています(写真参照)。

(アンドレア・フロレス・ウルシマ)

国際シンポジウム(京都)の 登壇者および共催・後援者リスト

講演者: ホザンジェラ・アラウージョ(バイーア連邦大学教育学部准教授)

パウラ・バヘット(バイーア連邦大学社会学部准教授)

討論者: 宇野邦一(立教大学現代心理学部名誉教授)

輪島裕介(大阪大学大学院文学研究科准教授)

ウスビ・サコ(京都精華大学人文学部長・教授)

司会: 福田宏(京都大学地域研究統合情報センター助教)

共催: NPO グルーポ・インズィンガ・カポエイラWS実行委員会

京都大学地域研究統合情報センター(CIAS)

地域研究コンソーシアム(JCAS)「地域研究

次世代ワークショップ・プログラム」

京都大学学際融合教育推進センター「分野横

断プラットフォーム構築企画」

JCAS 社会連携「女性地域研究者のライフ・キャ

リアネットワークプロジェクト」

NPO 平和環境もやいネット ほか

後援: 駐日ブラジル大使館



カポエイラの実践(京都大学稲盛財団記念館・中庭)



カポエイラの実践(京都大学稲盛財団記念館・大会議室)

地域研・相関地域研究シリーズ(全3巻)の刊行開始!

来年度、地域研は創立10年を迎えます。この間、地域情報学、相関型地域研究を2本柱として、センター全体、共同利用プロジェクト、地域研究コンソーシアム(JCAS)との連携、外部資金による研究、個人研究など、多様な形で研究を進めてきました。地域研教員のみならず、研究活動に参加して下さった皆様の協力により、9年目にあたる本年度に成果をまとめる段階に至った次第です。もちろん本シリーズは相関型地域研究の成果のひとつにすぎませんが、商業出版の研究書として広く内外に成果の質を問うことを目的としています。2015年度は第1巻を刊行し、来年度は第2巻、第3巻を刊行する予定です。

ここで本シリーズの名称となっている相関地域研究について触れておきます。いま世界各地が直面している複雑な諸課題に対して、ひとつの小空間ではなく、複数地域を横断する広域的な視点から迫ることが必要であることは、もはや常識ともいえます。21世紀の地域とは、連動し、影響しあい、それゆえ容易に変化する空間です。こうした急激に変化する地域を理解するためには、各地域の特性を明らかにするとともに、その地域がある種のアイデンティティを持ち得ていることを捉え、同時に、連鎖する複数地域とともに、世界においていかなる役割と意味をもっているのかについて、比較と関係性という二つのキーワードを用いて研究を試みるのが相関地域研究の手法のひとつなのです。また、時代と地域との相関関係、地域のなかで生み出された叡智や価値、倫理、宗教心との相関関係にも注目しています。わたしたちが標榜する相関地域研究は、地域を比較し、多様な関係性を顕在化させて、地域の成り立ちと変容を分析することを目的としているのです。

(貴志 俊彦)



第1巻『記憶と忘却のアジア』

貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編 (青弓社、2015年3月)

プロローグ「アジアからの記憶の召還技法」(貴志・山本・西・谷川)

第1部 21世紀的地域像を拓く

第1章「ミライの復興地——昭和三陸津波と東日本大震災」(岡村健太郎) / 第2章「記憶のアーカイブ——スマトラ島沖津波の経験を世界へ」(西芳実) / 第3章「家系図の創造——ボルネオの黄龍の子孫たち」(山本博之)

第2部 21世紀的記憶をむすぶ

第4章「往古への首都建設——平壤の朝鮮式建物」(谷川竜一) / 第5章「戦争の記憶と和解——韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題」(伊藤正子) / 第6章「交錯する農村の近代——岩手県沢内村と黒龍江省方正県」(坂部晶子)

第3部 21世紀的記憶を描く

第7章「黒船来航と集会的忘却——久里浜・下田・那覇」(泉水英計) / 第8章「日本人の性的イメージ——南洋を描いた中国語小説」(及川茜) / 第9章「グラフ誌が描かなかった死——日中戦争下の華北」(貴志俊彦)

エピローグ「相関地域研究についてひとこと——比較と関係性」(編者)

フィールドノート・データベース

構成：亀田 堯宙
協力：柳澤 雅之

新シリーズ「地域研データベース探訪」の第1回目として、柳澤雅之・准教授が中心となって行っている地域情報学プロジェクトで作られたフィールドノート・データベースについて紹介する。本シリーズでは地域研が提供しているデータベースの設計・運用に携わった人たちにインタビューを行い、データベース構築の背景や利用例、将来の展望について紹介すると共に、実際にデータベースを使ってみたい、同じようなデータを持っているのでデータを公開したいといった方々に情報を提供したい。

フィールドノート・データベース

(アドレスは近日公開)

地域研究者をはじめ、生態学者や文化人類学者といった様々な分野の研究者が世界各地に赴いてフィールドワークをしている。そして、フィールドワークをする時には何らかの形で調査記録をまとめる。その記録は個々の研究者が分析し、論文や本として発信することが多いが、その他の記録は公にされないことが多い。そうした埋もれてしまう記録自体を共有し活用することはできないか——フィールドノート・データベースはそのような試みである。

本データベースに記録されているのは、京都大学東南アジア研究センターに1967年～1995年に在籍した高谷好一・京都大学名誉教授が、東南アジアとその周辺国を中心として、地形や植生などの自然環境条件と地域社会の生業体系を詳細にフィールド調査した記録の一部である。まず、現地で記録した「フィールドノート」をパソコンに入力し、写真などとともに整理して『地域研究アーカイブズ フィールドノート集成』(以下『フィールドノート集成』)として地域研から出版した(高谷2012, 2013)。

次に、首都大学東京の高田百合奈氏、渡邊英徳・同准教授、山田太造・東京大学助教の協力の下、地図上にマッピングしてウェブから利用できるようにしたのがフィールドノート・データベースである。

▶ データを見てみよう

ウェブサイトにアクセスすると、図1のような画面が出てくる¹⁾。図1の①は、データの記録された時期によってデータを絞り込むための「時間スライダー」と呼ばれる仕組みである。②はメインの地図画面、③は後述するトピック分類でデータを色分けする仕組みである。④のSearchタブからはフリーワード検索などが使え、⑤には地点ごとのフィールドノートの具体的な記録が表示される。⑥の左の歯車アイコンからは設定、右の鳥アイコンからは鳥瞰モードの切り替えができる。以下では鳥瞰モードでのスクリーンショットを掲載する。



図1 フィールドノート・データベースのトップ画面

▶ 俯瞰する

高谷フィールドノートには様々な記述が出てくるが、特に作物の名前は頻出する。例えば、図1の④のフリーワード検索を利用して「コーヒー」を検索すると「178件見つかりました」と表示され、左のマップに「コーヒー」の記述を含む記録がなされた地点が光る仕組みになっている(図2。見やすくするため⑥の設定からアイコン表示を非表示にしている)。「ゴム」を検索した結果もともに示している。ゴムはスマトラ島に1900年くらいから持ち込まれた植物で80年くらいかけて広がっている。コーヒーも同様に商品作物として多くの村に広がっている。

モノだけでなく、人に関する記録もある。例えば、Melayu, Minangkabau, Java, Bugisなどの民族名で検索することでその分布を俯瞰できる。高谷の論文『スマトラの小区画水田』の冒頭に、小区画水田が分布するのは「Batak族とMinangkabau族の接触地帯」と紹介されているが、Batak, Minangkabau, 区画水田、を検索ワードにすることで、小区画水田の分布域を具体的に確認することができる²⁾(高谷ら1981)。

データベース構築にあたって、記録ごとの位置情報については、フィールドノートの記述から推定し地図上にプロットするという作業を人手で行っている。その作業によって、地名だけでは特定できないより正確な地理上の位置に個々のフィールドノートの記録をマッピングすることができている。最近のフィールドワーカーのフィールドノートならば、この作業は位置を記録するGPSロガーと呼ばれる機械や、GPS機能付きのカメラで撮影した写真の情報によって代替できるかもしれない。

個々のデータを見る

高谷は現場で観察した記録を、調査当日の夜、情報のかたまりごとにカード化して整理していた。フィールドノート・データベースで地点ごとの情報として示されているのは基本的にこのカード単位であり、場合によっては写真やイラストが付随している。個々の記録が具体的にはどのような記述になっているのか、それがどのような研究成果として発表されているのかを詳細に見ていこう。

先ほども少し触れた高谷の論文「スマトラの小区画水田」を参考に、まず小区画水田がどのような水田なのか写真で見てみよう。図1の⑥でアイコン表示をデフォルトにした上で「区画水田」を検索すると、地図上に多くの写真がマッピングされる。その中の一つをクリックすると、⑤に写真とそれに対応するフィールドノートが表示される。右上の矢印アイコンでノートだけを表示することもできる(図3)。さらに、この記述に現れる農耕具のことを知りたいと思った場合、さらなる検索をすればよい。例えば、「Tajak」を検索すると、そのスケッチと説明が得られる(図4)。

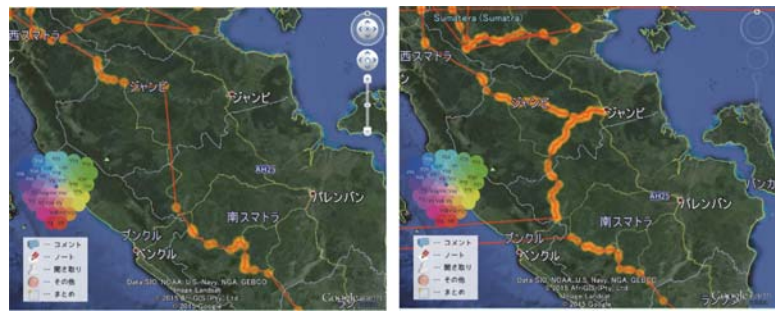


図2 コーヒー(左)とゴム(右)に関するフィールドノートの分布

データを読み解こう

これまででは、直観的に俯瞰することと、既に発表された論文を手掛かりに実際の記録を読むといった活用法を提示した。これらはフィールドノートの記録を分かり易く伝え、効率よく情報共有のためのフィールドノート・データベースの一つの活用法である。以下では、さらに一歩踏み込んで、データベースの中から研究者が新たな知見を得るための活用法について考えてみたい。

トピックで読み解く

フィールドノート・データベースでは、フリーワード検索に加えて、テキスト分析を応用した分析を実装している。Latent Dirichlet Allocation (LDA) と呼ばれる統計を用いたモデルで、共起する語彙をトピックとしてひとつの塊 (V) にまとめる手法である。フィールドノート・データベースでは、トピック (V) ごとに単語を色分けし、地図上で可視化している。トピックごとに属する語彙の例を表1に示した。例えば、水田耕作に関わる単語がまとまって同じトピックとして扱われていたりする一方、同じ単語でも文脈によって異なるトピックに割り当てられていることもある。図1の④のSearchタブにクラスター一覧表のリンクがあり、トピックごとに割り当てられている主な語彙を確認することができる。

トピックによる検索は、フリーワード検索とどのように異なるのだろうか。例えば、V5のトピックに割り当てられている語彙の中で「ゴム」は、樹液を採取するタッピングと呼ばれる作業や新植といった語と共起していることがわかる。一方、V15のトピックでは、「ゴム」は、主にオカボが主題になっている場所で現れる。こうした情報を手掛かりにして、フィールドノートの記録をさらに読み込むと、V5では古くからゴム園が多く、調査時(1984年)には、古木が更新されているというような記述が多くみられる。一方、V15では、オカボなどの自家消費用の作物や小規模なコーヒーなどの換金作物との組み合わせに関する記述が見られる。このように、同じ「ゴム」という語彙であっても、どのような語彙の組み合わせの中で使われているのかによって、異なる意味を持つことがわかるし、別の言い方をすれば、トピック分析によって、ある語彙が使われる異なる背景を抽出することができる。このように、フリーワード検索よりも内容に踏み込んだ検索が可能になっていることがわかる³⁾(表1、図5)。



Figure 3: Siphantan. 小区画水田の広がっている所で聞く。
(2)
1 ここではまだ水の溜まらないうちに掘で振る。やがて水が多く降るようになって、水が流れるようになると、それを田に入れる。そして水牛か人間が踏む。2 回踏む。その後、掘で畦を作り、掘で植える。
2 最近ではこうした面倒なことはやらないで、掘で耕

図3 小区画水田に関するフィールドノートの例



Figure 4: ここでcamatから聞く。
1 このKecamatanには74,966人がいる。93%が農民
2 水牛、山羊、鶏はいるが、牛、馬はいない。漁業は川
3 川では発取取りが重要な仕事だ。
4 これは伝統的には1.6mほどに伸びる掘の1作をや
5 自分たちが最も力を注いでいるのは水の管理だ。収
6 ここには次のような農具がある。(1)
① BangkungまたはBangkua: 除草に用いる。Desa K
② Cangkalまたはcankkuaまたはcabah: 掘起具。灌
③ Tajak: 除草具
④ Babat: 草を地上部のみ刈る道具。片手で持って通
7 昔は女が田で掘き、男はゴム園に掘きに出るという
なって来たので、男も田に出るようになった。

図4 Tajakによる検索結果の例

V4	Minang	樹皮	Bilis	チガヤ原	下り	煉瓦	裏作
V5	ゴム	ゴム園	タッピング	手入れ	植	周り	アブラヤ
V6	橋	Kalua	更新	Encik lb	Penyen	Riau	kincil
V7	家	ココヤシ	コーヒー	ゴム	周り	村	ドリアン
V8	本	収穫	実	油	自分	井	周り
V9	サゴ	工場	Rp	サゴヤシ	中国人	木	自分
V10	△	父	Singapo	サゴ	土地	オランダ	△
V11	炭	窯	炭焼き小	直径	鶏	松林	火車
V12	ゴム林	井戸	肉皮	土手	食堂	ココヤシ	太抵
V13	町	店	中心	北	川沿い	肉	Empang
V14	地区	Transmi	transmi	計画	高木	Bangkin	ft
V15	オカボ	トウモロ	コービー	焼酎	水田	鋤	ゴム
V16M	J	村	葦	水	Kuala E	上流	

図2 コーヒー(左)とゴム(右)に関するフィールドノートの分布

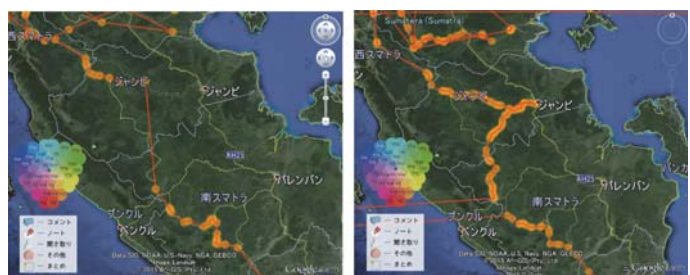


図5 ギョムからオカボへ

他のデータと組み合わせて読み解く

「高谷フィールドノート」のもう一つの活用法に、今となっても確かめることの難しい情報を入手できるという点が挙げられる。先述したオカボヤゴムといった換金作物に関する情報は、どのようにして森が切り拓かれていったかの記録としても読み解くことができる。例えば、Margono et al. (2012) は、スマトラの1990年以降の森林伐採の状況を衛星画像を手掛かりに描き出すとともに、1990年以前の状況については文献調査によって伐採に関わる主な活動を分析している(表2)。しかし、論文に出てくる稲やゴム、コーヒーなど作物の分布変化は、高谷フィールドノートでも確認できるし、地域によってはゴムから稲作へのシフトなど、論文で書かれているのとは逆の事例があることも確認できる。また、植林で植えられる成長の早い樹木の例として *Acacia mangium* が論文中には挙げられているが、そのアカシアを検索ワードにすることで、アカシアと共にアルビジアも植林に用いられていたことも確認できる⁴⁾。このように、高谷フィールドノートを他のデータと組み合わせることで、新たな知見の発見に役立てることも可能である。

また、例えば、ホテイアオイを調べている人がいるとする。ホテイアオイは「世界の侵略的外来種ワースト100」にも指定されている南アメリカ原産の植物で、Global Biodiversity Information Facilityのサイト⁵⁾で提供されているホテイアオイの観測データは世界中で2149が確認できる。しかし、そのうちスマトラ島に属するのは世界有数の植物標本館であるオランダ国立植物学標本館ライデン大学分館のものが3つのみになっている(図6)。これを高谷フィールドノートで検索してみると、「Kuantan川。大量のホテイソウが流れている」という記述が写真と共に見つかる。高谷の記録は標本を伴わないものの、これら3つの記録を地理的・時間的に補完するものとして、各地でのホテイアオイの侵略を捉えることができる。このように、他のデータとその視点を持ち込むことによって利用者個別の研究目的に応じて収集された情報を断片化されたファクトとして用いることができるのも、フィールドノート・データベースの利点である。

これらの他には、センサスデータと組み合わせる、標高や地形、地質などの情報と組み合わせるといった利用も可能である。多角的な利用が進められることによって、研究全体の底上げにもつながろう。

今後の展望

フィールドノート・データベースは「高谷フィールドノート」の全データを掲載するには至っていないが、記録の追加は続けられている。また、「高谷フィールドノート」に限らず、文化人類学、森林生態学、建築学といった諸分野から提供される記録を掲載することで、フィールドノートのデータベースとして、より一般的な活用を図っていきたい。さらに、利用者が自由にデータを追加できるような参加型のデータベースとしての展開や、現地の機関でも保存していないような歴史資料としての価値を活かすためにも、多言語で対応することにより、現地での利活用を促進できないかと考えている。乞うご期待。

関連資料

- Marugono, B. A., Turubanova, S., Zhuravleva, I., Potapov, P., Tyukavina, A., Baccini, A., Goetz, S., and Hansen, M. C. (2012) "Mapping and monitoring deforestation and forest degradation in Sumatra (Indonesia) using Landsat time series data sets from 1990 to 2010," *Environmental Research Letters* (7).
- 高谷好一 (2012) 『地域研究アーカイブズ フィールドノート集成』1～5巻 (CIAS Discussion Paper No. 22)、京都大学東南アジア研究センター・地域研究統合情報センター。
- 高谷好一 (2013) 『地域研究アーカイブズ フィールドノート集成』6～8巻 (CIAS Discussion Paper Nos. 36-37)、京都大学東南アジア研究センター・地域研究統合情報センター。
- 高谷好一・前田成人・古川久雄 (1981) 『スマトラの小区画水田』農耕の技術/農耕の技術研究会。
- 高田百合奈・渡邊英徳・柳澤雅之・山田太造 (2014) 「位置情報とトピックモデルに基づくフィールドノートのビジュアルライズ手法」『じんもんこん 2014 論文集』3号、57-62頁。
- 柳澤雅之 (2014) 「フィールドノート・プロジェクト」『シーダー』11号、14-21頁。

注

- 1) 初めに Google Earth のプラグインのインストールを求められる場合がある。以下のウェブサイトを参照。<https://support.google.com/earth/answer/178389?hl=ja> また、本記事の情報は2015年2月現在の情報であり、予告なくインターフェースやデータ、操作方法が変わる場合がある。
- 2) 本来は「小区画水田」で検索が可能であるが、「区画水田」での検索結果を示している。
- 3) LDA はアルゴリズムでトピックを推定しているため、手掛かりとしては活用できるが、研究上の知見を導き出すには個々のデータを確認しなければならない。
- 4) 日付: 1984-10-23、緯度: -0.572958、経度: 100.775389、「峠。Desa Palawi。この辺りで350haの植林計画を実施中という。アカシア、アルビジア。シモンなどを植えているという。」
- 5) <http://www.gbif.org/> を参照。2015年現在、5億を超える観測記録が145万種について提供されている。

情報とフィールド科学に関するブックレット・シリーズの創刊

地域研が進める地域情報学プロジェクトの成果として、新たにブックレット・シリーズを創刊します。山本博之『映画から世界を読む』(情報とフィールド科学1) 京都大学学術出版会、2015年。

目次: 情報から情報を引き出す方法論/「動画」は見るけど「映画」は見えない?/映画が「分かりにく」くなったわけ/「情報災害」の時代/欧米的な権威と様々な家族の形—アジア映画に映し出されるもの/アジア映画の中の家族/現実世界を見るための映画/映画とドキュメンタリー/ノイズを読む/映画の読み解き (1) 時間で4つに区切る/映画の読み解き (2) 場所の動きを捉える/映画の読み解き (3) 時間の流れを調べる/映画の読み解き (4) 登場人物の関係を見る/映画の読み解き (5) 違和感を探す/映画『マンガ肉と僕』を読み解く/引用され参照される事柄への着目—験と奥への足し算と引き算/制作者自身を知る/切り取り (フレーム)、紐づけ (スクリーン)、読み替え (オーディエンス)/現実世界が読めるようになるには

図2 コーヒー(左)とゴム(右)に関するフィールドノートの分布

Periods	Main drivers of forest cover loss	Other drivers of forest cover loss	Main drivers of forest degradation
	Beyond our time frame for analysis		
1950-70	<ul style="list-style-type: none"> Agriculture expansion notably rice cultivation Smallholder clearance for rubber and coffee Shifting cultivation 	<ul style="list-style-type: none"> Transmigration programs for tree crops (rubber, cocoa and coffee) and labor for timber industry Fires 1982-3 	
1970-90	<ul style="list-style-type: none"> Large-scale commercial logging concessions Large-scale forest plantations 		
During our time frame for analysis			
1990-2000 (the first decade of analysis)	<ul style="list-style-type: none"> Agriculture expansion mainly oil palm estate Establishment of pulp-paper and sawn-timber plantations 	<ul style="list-style-type: none"> Fires 1997-98 Transmigration programs Spontaneous transmigration activities Smallholder clearance for tree crops Transmigration programs 	<ul style="list-style-type: none"> Uncontrolled and controlled selective logging concession Illegal logging
2000-2010 (the second decade of analysis)	<ul style="list-style-type: none"> Agriculture expansion mainly oil palm estate Expansion of pulp-paper and sawn-timber plantations 	<ul style="list-style-type: none"> Spontaneous transmigration activities Limited fires 	<ul style="list-style-type: none"> Illegal logging

出典: Margono et al. (2012).



図2 コーヒー(左)とゴム(右)に関するフィールドノートの分布

これら3つの記録を地理的・時間的に補完するものとして、各地でのホテイアオイの侵略を捉えることができる。このように、他のデータとその視点を持ち込むことによって利用者個別の研究目的に応じて収集された情報を断片化されたファクトとして用いることができるのも、フィールドノート・データベースの利点である。

ワークショップ・ピックアップ (1)

個別ユニット「ポスト・グローバル化期の教育の国際比較」ワークショップ

共催：広島大学現代インド研究センター、同教育開発国際協力研究センター

日時：2014年10月25～26日

場所：広島大学大学院国際協力研究科



経済成長とグローバル化や知識基盤社会への移行を背景に、高等教育は世界各地で目覚ましく拡大している。それにもない大学の機能や構造も大きく変化し、もはやごく一部の人々を対象にした「知の殿堂」としてあればよい、という時代は終わった。こうした変化を端的に象徴するのが「大学教授職」のあり方だろう。本ワークショップでは、大学教員の位置づけ、期待される役割、処遇などについて、各国の事例に基づいて高等教育の様相、国家との関係、改革の性格について、議論を深めた。

南部広孝（京都大学）報告は、ワークショップ全体の議論の枠組みとして主として日本を事例に、高等教育の拡大を背景にした教育機能の強調、「規制緩和促進」という政府介入の拡大、産学協働の拡大や評価・能力主義の普及、これらの結果としての大学教員の自己認識の変化など基本的な条件を提示した。黄福涛（広島大学）報告は、アジア6か国の大学教授職国際比較データに基づき、国によって研究と教育のバランスや教授職資格などかなりの相違があることを概観した。井上史子（帝京大学）は、高等教育の拡大が続くヨーロッパ、とくにオランダを例に、EUレベルの欧州高等教育圏の確立と各国における高等教育の質的保証を背景とした国家レベルの「大学教授資格」の導入過程を検証し、「合意」を重視するオランダの政治文化のもとで大学と政府の協調がみられることを指摘した。渡辺雅幸（京都大学博士課程）は、制度の改革が進まないなかで高等教育が拡大しているインドを事例に、大学審議委員会を中心に大学教授職資格の導入や教育に特化していたカレッジレベル教員の研究力強化が模索されている様相を、また関口洋平（京都大学博士課程）は、公務員としての性格の強いベトナム大学教授職のあり方を報告した。

全体として、大学教員資格の導入や教育と研究のバランスの再検討、教育方法の改革（ファカルティ・デベロップメント）など課題は共通しているものの、高等教育における国家の比重や教育行政のあり方、これまでの大学形成の経緯などを反映して、その具体的な様相には大きな差異があることが確認され、それぞれの国の、また日本の高等教育改革を再考するうえできわめて有意義なワークショップとなった。（押川 文子）



ワークショップ・ピックアップ (2)

「ムダの魅力——地域研究の潜在性」

日時：2014年10月21日

場所：京都大学稲盛財団記念館



地域研と総合地球環境学研究所との共催で行われた本ワークショップでは、経済合理主義や効率性が声高く叫ばれるなか、さまざまな領域において「ムダ」とされている諸現象に対して、異なる地域と研究手法をもつ研究者が集まり、ムダの持つ「可能性と潜在性」について光をあてた。また、地域の枠組みを超えた議論を行うことで、現代日本や世界が抱える普遍的な課題として、自らにひきつけて考えることを目的とした。

趣旨説明を共同で行った大石高典（総合地球環境学研究所）は、自身の調査地であるカメルーンの熱帯雨林において、国家は地域住民が森を歩くことをムダだとみなしがちだが、森の中を自由にぶらぶらし、森の恵みを享受するということが、

地域住民の生活文化実践には欠かせないというギャップを例に引きつつ、「ムダはある側面から見ると非効率・非生産的だが、無視すると冗長性、豊かさを見失ってしまう。ある地域を描き出すうえで鍵になると思われる特性には、効率主義、功利主義的な世界観に基づいた基準では測りにくいものも少なくない。ムダを“真面目”にはかろうとすると、ミイラ取りになることがおおいが、それはムダが、ある価値の枠組みからははみでるものだからであろう。これをいかに可視化し、言語化できるかは独創性のある地域研究にとっては重要ではないか」と《地域を測量する》視点から問題提起した。

◆ 岡田勇（地域研）

「なだれ込む中古車はムダか——今日のボリビアにおける違法性と合法性」

ボリビアでは1998～2010年までの間に自動車登録台数が10倍に急増し、交通渋滞や環境汚染、石油燃料の輸入増といった問題を生み出してきた。その背景には、中古車密輸を制限することが難しいことや、好景気で中古車需要が高まったことがあった。ボリビア政府は、2008年から中古車輸入を制限しようとしたが、密輸として継続した。そこで政府は2011年6月に法133号を公布し、密輸の結果として正式な書類を欠いたまま市中を出回っている自動車を税関事務所まで持ってきて罰金と関税を払えば、「合法にしてあげる」という政策を実施した。この政策に対して12万台の申請があり、最終的に7万台弱が登録されたことは驚くべき点である。多くの人々が、なぜムダと思われる関税支払や合法登録を自発的に行ったかは興味深い謎である。

◆ 和崎聖日（地域研）

「旧社会主義・世俗国家でシャリーアはムダか——ウズベキスタンにおける婚姻を事例として」

本発表の目的は、旧ソ連の世俗国家であるウズベキスタンにおいて、シャリーア（イスラーム法）はムスリム民衆にとってどのような意味で有用かについて、「婚姻」という視角から、歴史動態を踏まえて検討することであった。世俗国家としてのウズベキスタンは、ソヴィエト法を継承する形で、国家法（世俗法）を唯一の正当な法制度とみなしており、イスラーム法であるシャリーア（sharī'a）を国家法の法源として完全に排除している。つまり、現代ウズベキスタンにおいてシャリーアは、国家の立場から見れば、いかなる法的効力も有さない、いわば「無用」（ムダ）な過去の法制度に過ぎない。しかし、現地のムスリム民衆の目線から彼ら／彼女らの日常生活を検討するならば、シャリーアは、人間関係を実質的に拘束する有用な「生ける法」として社会的機能を有しているのである。本発表では、ソヴィエト近代史の説明にやや重点を置き過ぎた感があるが、以上のことがらを話の筋として論じた。

◆ 濱田信吾（総合地球環境学研究所）

「雑魚と食の生態学」

混獲魚のような「ムダ」ととらえられ食料廃棄（food waste）されるものから人間社会における価値の重層性とその流動性を考察した。混獲魚は水産学、環境保全学では論じられることが多いが、市場価値がないため統計資料に表れにくく、経済学、栄養学で論じられることも少ない。そして消費されない魚は食文化史に残ることも少ない。雑魚という水産物がいかに経済的には「ムダ」となる一方で、社会的・政治的意味を包含した「嫌われるもの」としてアクターによって利用されるかという点を明らかにするための諸試論を発表した。また消費文化を考察するにあたり本研究で重要なのは、生産者（漁業従事者）も消費者であるという捉え方である。市場経済に取り込まれながらも経済学的には非合理的な食資源の廃棄という行為によって地域的アイデンティティを保持するという、文化と社会のグローバル化とローカル化の接点をフード・スタディーズを通じて展開した。

◆ アンドレア・フロレス・ウルシマ（地域研）

「都市の死と生——高度経済成長期の日本の都市と地方にとって何が肝心だったか？」

本発表では1960年代日本における都市開発にたいする再検討を行った。戦後直後から1950年代にかけて、日本では緊急性のもと、破壊された瓦礫のうでトップダウン型の都市再建が全国規模に行われた。その後、1960年代になると、復興にとって代わって経済成長をサポートするために都市開発が展開されたが、それは伝統的な生活様式や自然を破壊した形で進められた。その典型が大阪の千里ニュータウンである。しかし1960年代の都市開発は戦後復興にみる緊急性とは異なり、経済至上主義に立っていたため、地域社会のニーズ、および自然保全の再評価の必要性を唱える批判的な声が高まった。こうした反動は日本のみならず世界各地で展開した。ジェイン・ジェイコブズという女性の記者による1961年出版の「アメリカ大都市の死と生」は大きな反響を呼んだ。合理性・機能性・効率性を持つ大規模な都市開発は時に有用性を検証する必要がある、代替的なもしくは当時想定されなかった都市づくりをあらたに考察する必要が求められる。

今後は、この研究会が、地域コミュニティや地域研究者が、実践の中でどのようにムダを認識し、格闘し、生みだし、データ化しているのかを個別地域を越えたメタな視点から見つめなおすきっかけづくりとなることを期待したい。

（王 柳蘭、大石 高典）

2015年度の共同利用・共同研究プロジェクト

地域研は、全国の共同利用・共同研究拠点として、国内外の地域研究機関から課題の要請や助言を受けつつ、2010～2015年度の6年間の予定で共同研究を実施しています。個別共同研究ユニットの公募をへて、最終年度にあたる来年度の研究体制が固まりました。4つのプロジェクトの下、総括班3、複合同共同研究9、個別共同研究13、総計25のユニットを展開します。

詳細については、<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/project/> をご覧ください。

相関地域研究プロジェクト

【統括班】相関地域研究プロジェクト：〈地域〉を測量（はか）るー21世紀の「地域」像
(代表：林行夫 地域研・教授)

【複 合】ポストグローバル化期における国家社会関係
(代表：村上勇介 地域研・准教授)

【個別】ネオリベリズム以後の新興民主主義国の多様性：ポスト社会主義国を軸として
(代表：仙石学 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・教授)

【個別】体制転換における軍と政党：中東とラテンアメリカの比較研究
(代表：村上勇介 地域研・准教授、末近浩太 立命館大学国際関係学部・教授)

【個別】中央アジアの社会主義的近代化と現在：イスラームとジェンダーの観点から (代表：帯谷知可 地域研・准教授)

【複 合】地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦
(代表：ウィル・デ・ヨン 地域研・教授、柳澤雅之 地域研・准教授)

【個別】現代アフリカ社会における植物利用の持続可能性と地域植生の管理
(代表：山本佳奈 京都大学学際融合教育研究推進センター総合地域研究ユニット臨地教育支援センター・特定助教)

【個別】熱帯森林一都市関係の社会生態学的比較研究
(代表：阿部健一 総合地球環境学研究所研究推進戦略センター・教授)

【複 合】宗教実践の時空間と地域
(代表：林行夫 地域研・教授、小林知 京都大学東南アジア研究所／地域研併任・准教授)

【個別】仏教をめぐる日本と東南アジア地域：断絶と連鎖の総合的研究
(代表：大澤広嗣 文化庁文化庁宗務課・専門職)

地域情報学プロジェクト

【統括班】地域情報学の展開
(代表：原正一郎 地域研・教授)

【複 合】「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開
(代表：原正一郎 地域研・教授)

【個別】フィールドノートを対象としたテキストマイニングに関する研究 (代表：山田太造 東京大学史料編纂所・助教)

【個別】地域研究における時空間情報の実践的活用 (代表：関野樹 総合地球環境学研究所・准教授)

【複 合】非文字資料の共有化と研究利用
(代表：貴志俊彦 地域研・教授)

【複 合】CIAS所蔵資料の活用
(代表：柳澤雅之 地域研・准教授)

【個別】1950・60年代の東南アジア・ムスリムの社会史 (代表：坪井祐司 (財) 東洋文庫・研究員)

災害対応の地域研究プロジェクト

【統括班】強くしなやかな社会をめざして：地域研究の可能性
(代表：山本博之 地域研・准教授)

【複 合】災害・紛争と復興
(代表：西芳実 地域研・准教授)

【個別】ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究 (代表：村上勇介 地域研・准教授)

【複 合】記録・記憶と社会の再生
(代表：谷川竜一 地域研・助教、山本博之 地域研・准教授)

【個別】危機からの社会再生における情報源としての映像作品：東南アジアを事例として
(代表：篠崎香織 北九州市立大学外国語学部・准教授)

【個別】地域の集会的記憶の再編を支援する「メモリーハンティング」の展開と防災・ツーリズムへの応用
(代表：北本朝展 国立情報学研究所・准教授)

【個別】メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態
(代表：王柳蘭 地域研(白眉センター)・特任准教授)

地域研究方法論プロジェクト

【複 合】地域研究方法論
(代表：山本博之 地域研・准教授)

せめぎあう眼差し— 相関する地域を読み解く —

日時：2015年4月25日（土）13時30分～18時00分

場所：稲盛財団記念館 大会議室（3階・333号室）

趣旨

インターネットが爆発的に普及した現在では、世界を知ることがかつてなく容易になった。検索さえすれば、一瞬で大量の情報を得られる。だが、そこには様々な見方が含まれている。中には誤解や偏見に満ちた情報もあるだろう。私たちは、何でも知り、自由に発言できるようでいて、実際には、一面的な情報に依拠したり発信したりする度合いが増えているだけなのかもしれない。情報量の増大が、相互の理解ではなく対立を煽っているとすれば、それは大いなるパラドックスである。

とすれば、地域を理解し、社会を理解するとは一体何だろうか。言うまでもないことだが、私たちは神の視点に立って他者を見ているわけではない。個人と個人の間であれば、両者は具体的な関係性の中でお互いを理解していく（或いは、理解したと認識する）。集団間においては、それが更に多層的となる。職場や学校、自治体などのレベルから、国家や宗教、ヨーロッパやアジアといった地域のレベルにおいても、人々は関係性の網の目の中で他者を理解する。

つまり、地域や社会を読み解くとは、厳密に言えば対象そのものを読み解くことではない。それは、関係性の網の目に囚われた自己と他者を意識しつつ、「私たち」と「彼ら／彼女ら」の眼差しを読み解く試みである。ただし、「私たち」と「彼ら／彼女ら」という区分そのものも、実際には相対的である。或る現象を単純に欧米とイスラムの対立と表現したとき、中間的立場の存在は捨象されてしまう。極端な場合、人々はどちらかの陣営につくことを迫られる危険性すらある。

本ワークショップでは、誰が何をどのように見ているのか、すなわち、眼差しがせめぎあう具体的な現場を題材にして、社会や経済、国際政治、文化の側面から、相関する地域を読み解くことを目的とする。当然のことながら、関係性の網の目は複雑であり、かつ動的である。ここでは、自己と他者の相対性に留意しつつ、世界の各地域へと迫っていききたい。

プログラム

13:30～13:40	はじめに（原 正一郎・地域研 センター長）
13:40～13:55	趣旨説明（福田 宏・地域研）
13:55～14:30	アメリカの核戦略と放射能汚染の「地球的思考」 樋口 敏広（京都大学白眉センター）
14:30～15:05	ドヴォジャークの「辺境」とチェコから見た「新世界」 福田 宏（地域研）
15:05～15:20	Coffee Break
15:20～15:55	ゴリラから読み解くカメルーン：狩猟と農耕の相関性 大石 高典（総合地球環境学研究所）
15:55～16:30	ボリビアの豊富な資源と「国有化」をめぐるねじれ 岡田 勇（名古屋大学大学院国際開発研究科）
16:30～16:45	Coffee Break
16:45～17:55	コメントおよび総合討論 コメンテータ：松田 素二（京都大学大学院文学研究科） 村上 薫（アジア経済研究所）
17:55～18:00	おわりに（貴志 俊彦・地域研 副センター長）
18:30～	懇親会 場所：稲盛財団記念館中会議室（3階・332号室） ※会費制

休憩室では現在地域研が公開している各種データベースのデモを行います。是非お試しください。
問合せ先：共同利用・プロジェクト構想委員会 project@cias.kyoto-u.ac.jp

アジアの防災コミュニティを担う次世代を育てる

日本=インドネシア合同で神戸被災地のメモリーハンティングを実施

JSTの日本・アジア青少年サイエンス交流計画（さくらサイエンスプラン）により、防災研究を志すインドネシアの学生を日本に招き、防災に関する博物館等の見学やスマホ・アプリを用いた被災と復興の記憶の継承などに取り組みました。

阪神・淡路大震災から20年目、東日本大震災から4年目を迎える日本では、震災の記憶の風化が危惧されています。そこでは、被災や復興の記憶を伝えることで防災コミュニティを築き、次に来る災害に備え、さらには災害に打たれ強い社会を作り上げることが期待されています。

ただし、留学・出稼ぎや移住により人口の流動性が高く、地方で高齢化・過疎化が進むアジアでは、震災の記憶の継承を通じた防災コミュニティ作りを国内で完結させようとしても十分ではありません。

本プログラムでインドネシアから招聘した学生たちは、日本の高校生と一緒にいった阪神・淡路大震災の被災地でのメモリーハンティングを含め、それぞれが多額のものごとを見聞してアチェに帰ったようです。帰国後、参加者がそれぞれ日本での研修について紹介する記事を地元の新報に寄稿し、すでに何度も掲載されています。スマホ・アプリで学んだことを新聞記事で人々に伝えていることは、新旧の技術を組み合わせる各現場にふさわしい方法を選んで示していることを示しており、将来が期待されます。（西 芳実）



さくらサイエンスプランで来日したインドネシアのシアクアラ大学の大学生と大阪府立北野高校スーパーグローバル・ハイスクール・プログラムの高校生たちが神戸市内で行ったメモリーハンティングの様子



京都市民防災センターでの消火訓練の様子

自著を語る

書籍情報

『日中間海底ケーブルの戦後史 — 国交正常化と通信の再生』

貴志 俊彦 著（吉川弘文館、2015年1月）

本書は、筆者が5年前に京大地域研に赴任して以来、3冊めとなる単著です。ただ、本書は赴任後の新たな企画で、歴史学と地域研究の方法論を融合させようと四苦八苦した作品でした。この間、なんだか中断しましたが、日中間海底ケーブル共同建設事業に従事した日中双方の関係者の支援・激励があって、ようやく刊行に至ったのです。

この海底ケーブル建設事業は、日中共同声明発表の翌年、つまり1973年5月に久野忠治郵政大臣と鐘夫翔電信総局長とが締結した「日本・中国間海底ケーブル建設に関する取極」にもとづいて着手されました。両国政府間の主導によって開始された事業でしたが、実際の建設業務はKDDと上海市電信局（のち上海市郵電管理局）が担当しました。この双方の尽力によって、戦後30年間途絶していた日中間海底ケーブル通信が1976年10月に再開されたものの、78年10月からケーブルの断線が続くなど、波乱にみちた通信ケーブルだったのです。

【目次】プロローグ 日中間通信の幕開け／第1章 「終戦」の合意から日中初の共同事業へ／第2章 建設前の日中間交渉／第3章 海底ケーブル建設工事／第4章 ケーブルの開通から断線まで／第5章 復旧への長い道のり／第6章 グローバル通信の時代へ／エピローグ 日本の技術的成果と中国の政治的意義

（貴志 俊彦）



地域研究コンソーシアム (JCAS) の活動

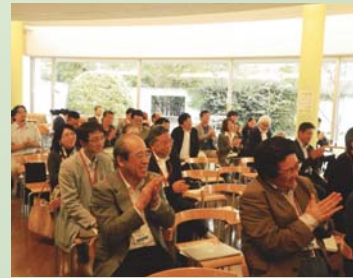
2014年10月31日～11月1日、日本貿易振興機構アジア経済研究所(千葉市)において、毎年恒例の地域研究コンソーシアム (JCAS) 年次集会被開催されました。JCASの1年間の活動報告、第4回地域研究コンソーシアム賞の発表・授賞式を含む総会の後、アジア経済研究所とJCASの合同企画による一般公開シンポジウム「地域から研究する産業・企業——フィールドワークとディシプリン」が開催され、経済学と地域研究的なフィールドワークとの接合をめぐって活発な議論が行われました。また、年次集会の前後に設定されているコンソーシアムウィークの催しとして、次世代ワークショップ「アフリカにおける開発と障害」も実施されています。

第4回地域研究コンソーシアム賞の受賞者は次の方々です。

- 【研究作品賞】 末近浩太著『イスラーム主義と中東政治——レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』(名古屋大学出版会、2013年)
- 【登 竜 賞】 塩谷哲史著『中央アジア灌漑史序説——ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』(風響社、2014年)
高橋美野梨著『自己決定権をめぐる政治学——デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」』(明石書店、2013年)
- 【研究企画賞】 谷垣真理子(代表)「国際研究プロジェクト『華南研究の創出』」(『変容する華南と華人ネットワークの現在』(風響社、2014年)の刊行を含む)
- 【社会連携賞】 アジアプレス・インターナショナル「報道ウェブジャーナル『アジアプレス・ネットワーク』における現代アジア報道」

JCASの加盟組織は2015年2月末現在で98となりました。次世代ワークショップやオンデマンドセミナーなど各種の公募プログラムや、JCAS賞公募など、2015年度の活動に向けての詳細情報はJCASホームページに掲載されますのでぜひご覧ください (<http://www.jcas.jp>)。また、JCASのメールマガジンJCAS NEWSは地域研究に関連するイベント、公募、出版などの情報を毎週発信しています。配信を希望される方は、jcasnews-join@jcas.jp宛てに本文なしのメールを送信してください。

(帯谷 知可)



JCAS 年次集会・総会



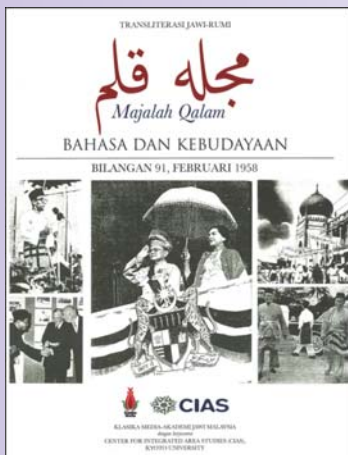
一般公開シンポジウムのパネリスト



JCAS 賞授賞式

・ 出版物の紹介 ・

地域研が刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。



Majalah Qalam

Klasika Media-Akademi Jawi Malaysia/ CIAS

『カラム』雑誌記事データベース・プロジェクトの成果の一部として、『カラム』のオリジナル誌面(ジャウイ)とそのローマ字翻字を見開きで並べた復刻版。1950年から1969年まで刊行された『カラム』全229号のうち、マラヤ連邦独立後に刊行された1957年9月号より5号ずつ配本している。2014年下半期には1958年2月号から6月号までの5冊が刊行された。

新任紹介

亀田 堯宙助教が着任しました

これまでは、ウェブを用いた情報共有や、コンピュータによる文書の解析・構造化をテーマに研究してきました。近年は特に、生物多様性情報を中心として、学術情報の流通を対象に情報共有手法の研究を行っています。

地域研究統合情報センターやその共同利用・共同研究拠点としての外部と連携した活動の中で、多くの研究者が、収集した地域研究資料をデータベース化し、公開されています。私の大きなミッションは、これらのデータベースをより多くの方に実践的に使ってもらうにはどうすればよいか、情報学の技術を駆使しつつ、それにとどまらない柔軟さで提案・実装していくことです。

このミッションは情報学としてもエキサイティングなテーマです。ここ数十年ほどの間に、ハードウェアだけでなくソフトウェアにおいても情報技術は急激に発展しました。画像・音声・テキストといったメディアを処理し、コンピュータにそれらを「理解」させる人工知能の発展は多くの人々を驚かせました。しかし、その「理解」を人間と協働できるほどに実践的に活用するにはまだまだ多くの難題があり、発展の余地があります。

様々な資料と、地域研究者によるそれらの資料の読み解きに触れる度に、奥深さに興奮させられます。その面白さを伝え、社会に価値を還元できるように、地域研究者だけでなく他の分野の研究者や一般の方々の読み解きを支援できるような情報発信に携わっていきたいと考えています。



(亀田 堯宙)

人文情報学のイベントで地域研のデータベースを紹介する亀田助教
(撮影：加藤文彦)

The Last Photograph

Almost 8000 kilometres separates the Centre for Integrated Area Studies in Kyoto from the Karelian Institute at the University of Eastern Finland. The climate, the culture and the atmosphere could hardly be more different, and yet we share a number of common interests and a devotion to area studies as a way of furthering our understanding of the world. The distance between Finland and Japan is getting smaller – global warming has made reality the possibility of opening up the northern sea route, and this could make Finland a key transit country for Japanese trade with Europe. Government authorities in Finland and Japan are actively discussing cooperation on such a project. Much will depend on our shared and unpredictable neighbour – Russia, which controls much of the sea route. Past experience with, for example, the Northern Dimension partnership, suggests Russia can be a reliable partner in such



The Karelian Institute at the University of Eastern Finland

projects in spite of increased geopolitical uncertainties. It will be a long process, but we look forward to closer links in the future.

(Jeremy Smith, Visiting Scholar at CIAS (October – November, 2014)/ Professor, University of Eastern Finland)



京都大学地域研究統合情報センター
ニュースレター No.16

●発行日 2015年3月24日

●発行者

京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町46

Tel : 075-753-7302

Fax : 075-753-9602

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

●編集責任 福田宏

●編集協力・表紙デザイン 川島淳子

表紙写真について

増水期のアマゾン川の岸に建つ自宅から、カヌーで登校するペルーの小学生(村上勇介)